

ナジ・アーコシュ作曲『The Trees of Hiroshima [被爆樹木]』について

1945 年 8 月 6 日、人類最も凶悪で破壊的な兵器である原子爆弾が広島に投下されました。かつてそこに立っていた木々、そして今日もなお立っている木々は、この恐怖の静かな証人でした。

これらは原子爆弾の破壊を耐え抜いた木々であり、日本語では「被爆樹木（ひばくじゅもく）」、つまり「生き残った木々」と呼ばれています。現在、170 本の被爆樹木が存在し、32 種の異なる樹種を代表しています。

爆心地に最も近い被爆樹木はシダレヤナギで、地上ゼロ地点からわずか 370 メートルの場所に立っています。元の木は爆風で倒れましたが、根は生き残り、残った芽から新たな命が芽吹きました。

「原爆で傷ついた木々は私たちの日常の一部です」と語るのは、これらの木々を人類の文化遺産として認識し、未来へ保存するプロジェクトを立ち上げた山本優樹さんです。彼はこう続けます。「原爆の生存者たちが年を重ねるにつれ、彼らの物語を伝えることが難しくなってきました。私はこれらの木々が、人々に戦争と平和について考える機会を与えてくれることを願っています。」

爆撃を生き延びた植物の種や芽は集められ、まず広島内で、そして日本全国、さらには海外



最初の音楽イメージは報専坊のイチョウの木で、原爆投下時には寺町の報専坊寺の境内に立っていたとされる壮麗なイチョウの木です。住職と家族 3 人が亡くなったにもかかわらず、その木はひどく焼け焦げながらも、倒壊した寺院が完全に焼失するのを防ぎました。驚くべきことに、数年後には再び芽吹きました。仮設の堂での多年の礼拝の後、1994 年に新しい本堂が完成しました。建設者たちは木を切り倒す代わりに、本堂入り口へと続く階段に大きな開口部を設け、イチョウの木がその間を伸びています。寺はもともと鎌倉時代後期（1192～1333 年）に広島北部の加部に創建され、17 世紀後半に現在地へ移されました。寺町のすべての寺院は浄土真宗、すなわち真宗大谷派に属しています。最初の旋律は天鈿女命（あめのうずめのみこと）の神楽の旋律です。これは直ちに浄土教で非常に重要な阿弥陀如来の再誕のための陀羅尼（だらに）マントラによって中断されます。このマントラは、作品のヴァイオリンやピアノの全ての動きにおいて、一種の固定概念

のコミュニティに配布されました。その植物の子孫たちは今日も世界中で育ち続けており、自然が戦争に勝利しうることの生きた証しとなっています。

のように繰り返し現れます。マントラを唱える者たちが西方浄土への再誕を願って繰り返し唱えるように、この作品で繰り返し登場するマントラに関連する旋律は「再誕」、すなわち木々の再生を示しています。

当然、この作品で使われている神楽の旋律は原曲の歪められたバージョンであり、マントラの旋律は完全に私自身の創作です。



(画像 2)

次の旋律の音楽イメージは爆心地から 1,580 メートル離れた場所にある、ウメ、クスノキ、クロマツ、モミジの群れを描いています。これらの木々は 17 世紀に建てられた徳応寺の境内にあります。特に、モミジは原爆で生き残った唯一の例として知られています。クスノキの樹皮は典型的なものとは大きく異なり、自然の異常か原爆の影響かは不明です。

徳応寺はもともと紀州（現在の和歌山県）に創建され、17 世紀に現在の場所に移されました。原爆で寺院の建物は破壊されましたが、戦後に再建されました。

この部分では、マントラ旋律がその縮小形や断片化した形態とともに登場し、さらに龍笛、神楽笛、神楽笛（こまぶえ）、尺八の旋律の残響もあります。これらは様々な雅楽の作品か

なも あみたーばや とたがたや

たぎゃた

あむりたどばへ

あむりたさんばへ

あむりたびくらんて

あむりたびくらんた

がみね ががな きーたかれ すわは

阿弥陀如来（無限の光の如来、「如来（トゥサネス）に至った者」）への敬礼。

すなわち：

不死（アムリタ）の生み主よ、

存在の状態が不死である者よ、

不死を超越する者よ、

不死を超越する者よ、

空を行く者よ、空の栄光の中を動く者よ、

万歳！

ら認識可能かもしれませんが、ここではあくまで儚いほのめかしとして使われています。最も伝統的な雅楽のテクスチャーに近いのは、笙の「越天楽」のクラスター音がヴァイオリンに模倣されている部分です。

次の旋律の音楽イメージは、爆心地から 940 メートルの近龍寺にあるクロガネモチの木 2 本を示しています。木の幹は爆風の方向に傾いており、爆発の力を今に伝えています。寺は 1632 年に建てられ、原爆で破壊され、戦後に再建されました。(画像 2)

四つ目の音楽イメージは、爆心地に最も近い生き残りの木であるシダレヤナギを示しています。爆風で幹は砕けましたが、新たに芽吹きました。

近くには特徴的な T 字型で空から認識しやすいために爆撃目標に選ばれた相生橋があります。

コーダといくつかの鳥のような旋律の断片を除き、この楽章全体はマントラ旋律で構成されています。ほぼ伝統的な五声フーガに発展し、原題、逆行、反行、逆行反行、縮小形の変奏を重ねています。ストレット部分ではフーガの主題がますます接近して連続的に入り、カノンのように重なり合い、テクスチャーが爆発し未解決の完全五度で終わります。重なりは再開し、今度は応答が二重に反転して現れます。この原題と鏡像のフーガ主題は後にヴァイオリンで反響し、二つの対照的なシークエンスといくつかのオスティナートのフィギュアに続きます。

五つ目の音楽イメージは、爆心地から 1,150 メートルの寺町にある西本願寺広島別院のサゴヤシを示しています。寺は 1459 年に創建され、1609 年に大名の福島正則によってこの地に移されました。サゴヤシは約 100 年前の絵にも描かれており、爆撃で本堂が破壊された際に 1964 年に再建され、その際に慎重に鐘楼のそばに移植されました。

この音楽の部分は、ゆったりとした広がりのあるモチーフと、より速くりズミカルなモチーフを対比させています。それらは哀愁を帯びた、空気のような賛美歌的な旋律に変わり、ヴァイオリンの高音の倍音で演奏されます。明らかにマントラのテーマに根ざしています。やがて元の 2 つのモチーフが戻り、前節の構造を踏襲してヴァイオリンによるマントラの多声音楽で終結します。

最後の音楽イメージは、爆心地から 1,800 メートルの白島にある井中神社のヨシノ桜とタブノキです。「井中（いかり）」は「錨」を意味し、かつて船が停泊し陰陽道の守護神に祈りを捧げた場所に由来しています。白島地区は 16 世紀まで「箱島」と呼ばれた島でした。

井中神社は広島でも最古の神社の一つです。原爆の爆風で焼け焦げましたが、これらの木は後に根から再生しました。神社は完全に破壊されましたが、1965 年に再建されました。

この最後の部分では、マントラは大きく歪められ、ピアノからヴァイオリンへと受け渡されます。ピアノはオスティナートを奏で、その上をヴァイオリンが狭く不協和音的な旋律を紡ぎます。この果てしない掛け合いの中で、思いがけずお馴染みの旋律が現れます。それは江戸時代の都市の人気旋律「さくらさくら」です。